

地域研究所の将来に期待すること

桜井国俊

「地域に根ざす大学」をめざす沖縄大学は、教育・研究の各面にわたって地域との連携を強めていく必要があるが、そのなかで大きな役割を果たすことが期待されるのが地域研究所である。創立15周年記念事業の連続シンポジウムの開催、ジュニア研究支援事業の実施、科学研究費による近海離島総合研究の推進など、地域研究所を中心とした活動の進展には近年めざましいものがあるが、沖縄の現実には、地域と連携した同研究所の活動の一層の強化を必要としている。特に期待されているのが、地域の発展のランドデザインを示す「地域のシンクタンク」としての役割の強化である。

現在の沖縄経済社会は、基地関連の収入と基地容認の見返りとして提供される高率補助金による公共事業に大きく依存しており、社会経済的にも、文化的にも、また環境的にも持続可能なものではない。そのことは、いわゆる三位一体改革による地方自治体の財政悪化として、すでに現実のものとなっている。沖縄の持続可能な発展のシナリオの作成提示が早急に求められる所以である。

財政力指数が0.1前後と軒並みに低く、高率補助金に依存しきってきた沖縄の自治体は、全国自治体の中でも最も脆弱な財政基盤の上に立つ。更なる財政悪化が不可避の今日、従来地域経営の発想は根本からの転換を迫られている。2004年度入学式において記念講演を予定している吉井正澄前水俣市長に「回れ右」をして一番先頭に立つという発想の転換が必要である。地域研究所には、このパラダイムシフトを先頭に立って推進し、「地域のシンクタンク」としての役割を果たすことが求められている。

近年の日本社会は、とくにバブル崩壊以降活力を失い自信喪失でさえある。一方では国際化によ

る異なる文化・価値観との共生を通じた外的刺激により、他方では過度の画一化で失われた地域の個性を取り戻すことにより、その活性化を図る必要がある。なかでも際立った地域特性を持つ沖縄は、足元を見つめなおす「地元学」のアプローチによる活性化によって、日本の他の地域の活性化のモデルとなる可能性を秘めている。沖縄大学の地域研究所が、地域との連携による研究・教育活動の強化によってこの可能性の具現化の先頭に立てば、それは沖縄大学の活性化にも大きく貢献することになる。

ところで最近コスタリカを再訪したからでもあるが、水俣の地元学に加えてコスタリカの平和教育とエコツーリズムも沖縄発展のランドデザインづくりに参考とすべきではないかと考えている。沖縄は、歴史的背景からも、また現在おかれている状況からも、積極的に平和をつくっていくことが持続可能な開発の前提となる。被害者体験、加害者体験にもとづく沖縄や日本の平和教育が、語り部の減少などによって活力を失いつつある今日、被害者・加害者体験にもとづかない平和教育を展開しているコスタリカに学ぶことは、平和教育の活性化につながると考えられる。また入れ込み客数を制限して付加価値の高い観光を提供しているコスタリカのエコツーリズムは、年間客数1000万人という量的拡大を目指し、持続可能性に欠ける沖縄の観光に大きな教訓となるに違いない。平和学の再生と持続可能な観光への転換が沖縄大学地域研究所から始まることを期待している。